



天 界 新 知 識

新知識各項に附けた番號は便宜上のもので分類に關係はない、各人の分類整理に應用されたい。

507.

ヘルクレス新星の二重性

ヘルクレス座に1934年末に現はれた新星が分裂して二重星となつたことは、いち早く花山急報にも載せられたことであるが、米國リク天文臺で G. P. Kuiper 氏の測定によれば

1935年七月 3日	二星の位置角	130.6	角距離	0.21	光度差	0.4
13日	”	126.3	”	0.22	”	0.3
14日		133.0		0.23		0.4
26日		129.0		0.21		0.3
八月 8日		129.6		0.22		0.4
10日		132.2		0.22		0.4
17日		131.4		0.22		0.4

此の間に何の變化も見出されない。

新星は去る十二月に分裂し、加速度で分離しつつある。しかし本年三月31日や四月27日には光度12等以下で、分離は充分に認められなかつたが、六月10日には8等級の光であつたので、空氣さへ良ければ分離は見えたかも知れない。

蘭領インドのレンバン天文臺で臺長 Voute 氏が 60cm の赤道儀で觀測した所では

1935.598	位置角	131.6	角距離	0.204	光度差	0.2
----------	-----	-------	-----	-------	-----	-----

であつた。〔PASP. 279〕

508.

琴座の環狀星霧にガス外色發見

去る八月6日、米國キルソン山天文臺の 100吋⁷ 大反射鏡を用ゐ、84吋⁷ にしほつた鏡面で J. C. Duncan 氏が琴座の環狀星霧 (NGC 6720) の寫眞を撮つた。曝露時間は30分であつたが、空氣は良かつた。現象の結果、此の寫眞は、環狀星霧の周圍にハッキリと可なり大きいガスの外被が現はれてゐるのに驚かされた。其の後、八月27日にも、58分間の曝寫で口径一パイの鏡面で寫眞を撮つたが、之れにも明瞭に出てゐる。

外被の直径は約145[〃]で、今まで知られてゐるかの環狀のはゞ2倍の大きさであるが、測微光度計によると、確かに200[〃]以上にまで擴がつてゐる。

こうした外被のものはアンドロメダ座の N. G. C. 6772 といふ有名な遊星形の星霧にもあるのであつて、其れは 3727 Å の光波に富んでゐることが Wright 氏のスペクトル研究に知られてゐる。〔Lick Pub. 13, 193 (1918)〕 若し此うした事が一般の遊星形

の星霧に共通の事實であるとする、こんど琴座の星霧に之れが発見されたのは全く此の反射鏡面がアルミニウム面になつた結果の能率によるものと思はれる。〔PASP. 279〕

因みに、琴座の環状星霧が、實は單に環状だけのものでないとは、1924年十月山本一清博士がジュネーブ天文臺にシエア氏を訪ふた時、口径100センチF3の自製反射鏡でシエア氏が撮影した此の星霧の寫真中に認めた所である。〔天界第53號第199頁〕

509. リク天文臺の緯度

去1933年末、米國リク天文臺に於いて子午線部主任 H. M. Jeffers 氏が緯度の觀測をした。大陸移動などの説のやかましい時であるから、ハミルトン山上にある此のリク天文臺の位置が、以前の觀測と比べて何か異變でも起してゐるやしないかとの問題もあつたから、機械は米國政府の測量部から借りた小型バンベルヒ子午儀で、タルコト法に據り、星の赤緯は Albany 天文臺の作製中の總目錄のものをを用ゐた。結果は〔PASP 279〕

6 夜の測定の平均値	北緯 37° 20' 24.93
緯度變化による平均北極への修正	+ 0.02
子午環室への修正	+ 0.33
故に	37 20 25.28

510. ミシガン州に高塔望遠鏡

米國ミシガン大學 アンナボア天文臺附屬 McMath 天文臺に、太陽面の現象を活動寫眞で撮影する目的で、新しく高塔望遠鏡が建設されることがアンボア天文臺長 H. D. Curtis 氏から公表された。塔の高さは40尺で、其の直下に30尺の井戸を掘り、結局、全長70尺の望遠鏡となる筈である。

511. 米國に第四のプラネタリウム

米國に四つのプラネタリウムが出来上つた。第一はシカゴ市の湖岸に數年前に完成したアドラー氏記念のプラネタリウム、第二はフィラデルフィヤ市フランクリン學院天文部に1934年完成したフェルス氏記念プラネタリウム、第三は1935年五月ロスアンゲレス市ハリウッドに出来上つたグリフィス天文臺の主要部としてのプラネタリウム。そして、第四は最近ニウヨーク市の天然理學博物館の一部として出来上つた Hayden ハイデンプラネタリウムである。シカゴとロスアンゲレスは P. Fox 博士が主任、フィラデルフィヤのは Stokes 博士、ニウヨークのは C. Fisher 博士が主任となつた。

512. 太陽と白鳥 γ 星中にサマリウム發見

近來、米國キルソン天文臺の King 博士が稀有元素サマリウムのスペクトルを研究して之れを發表した〔ApJ. 82, 2. (1935)〕。之れの結果を用ゐて、W. Albertson 氏は太陽のスペクトル中に60本の線を同定し（内12本は今まで未知のものであつた）、又、白鳥座のガンマ星のスペクトル中にも12本のサマリウム線を見つけた。〔PASP. 279〕